UEDA
Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報

みすず

No.44
2017.12

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

図書館の肥やし

総合文化学科　教授　花 岡　勉

人生を一周するまでの間、数えてみると２度の一家転住や単身赴任を含め９回も引越しを繰り返してきた。その都度、整理した本をダンボール箱に詰めて実家に送りつけてきたが、２階の蚕室に据え付けた大棚やスチール製の３本の本箱は、書物を読むことを生業としてきただけにどの棚もぎっしりと専門書や雑多な本で埋め尽くされている。その中には略読しただけの本も少なからずあるが、極めつけは何と言っても全29巻にも及ぶ百科事典であろう。

私の教員生活のスタートは木曽東高校（現在、木曽西、木曽山林の３校が統合されて木曽青峰高校となる）であるが、当時、手取り９万円余の新人教員にとってブリタニカ社の国際大百科辞典はその３倍余もする高価な代物であった。専門外の世界史と倫理社会を担当するにあたり、にわか仕込みの情報源として分割払いで手中に収めたものの、教員住宅を訪れた同僚から「図書館に最も近いところで働いているのが我々教員である」の言葉にたがわず、六畳一間に平積みされた辞典は数冊をごろ寝用の枕にするだけで、実家においてもタンスの肥やしならぬ本棚の肥やしと化してしまったのである。

爾来40年近く時は流れ、私はいまだに図書館に最も近いところで働いている。一冊でも重かった百科辞典は手の平サイズの電子辞書に収載され、ネットでの検索も容易になったこともあり図書館へ足を運ぶことが極めて少なくなった。今日、本の貸し出しは個人情報の保護とともにバーコードによって管理されているが、嘗ては本の見返しに添付された子袋に貸出カードが入っており、貸出日、氏名、返却日などが記載されていたので貸し出し状況が一目できた。カードにあこがれの先輩（特に女性）が記されているだけで読書欲に拍車がかかったものである。

本学の地域に誇れる図書館にも本や雑誌、新聞等が書架やラックを埋め尽くしているが、それらが私の事典のごとく図書館の肥やしであっては何ともやるせない。当節は老いも若きもスマホが命、いつ何時もこの小さな情報モンスターを手放せない状景は奇異ではあるが、どのように時代が変わろうと図書館は世代を超えた教養の拠点であると同時に訪れる人々の安息の空間でもある。私も週に一度ぐらいは年々歳々やせ細っていくばかりの我が精神を暫し図書館で肥やしたい。

目次　CONTENTS

図書館の肥やし	総合文化学科　教授	花岡　勉	1
史料との出会い	幼児教育学科　専任講師	山本　一生	2
ウェディングドレスはなぜ白いか	総合文化学科　准教授	増田　榮美	3
「本」の魅力	幼児教育学科　１年	内山　夏恋	4
本と私	幼児教育学科　２年	鳴澤　舞衣	4
本との出会い	総合文化学科　１年	松井　楓	5
本の虫	総合文化学科　２年	豊岡　桃子	5
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本	幼児教育学科　教授	笹井　弘	6
	総合文化学科　教授	大橋　敦夫	6
本学教員の新刊著作			6
上田女子短期大学附属図書館企画展			7
第19回図書館総合展			8

史料との出会い

幼児教育学科　専任講師　山本　一生

歴史研究にとって最も重要なことは、史料の収集である。史料は一般に文字で書かれたものを指し、資料は文字史料を含め、さらに写真や音声といった文字以外のものも含める。収集した史料を根拠として意味内容を検討し、複数の史料を付き合わせて史実の解明に努め、それを論文にまとめていく。およそ歴史研究は、このように行われている。

そこで本稿ではこれまでの史料収集を紹介し、さらに海外での史料収集についてその体験を述べていきたい。

戦前の日本の植民地での教育に関心を持つ私は大学院生時代に東京近郊に住んでいたため、都内の史料館に比較的通いやすかった。文献資料は東京大学総合図書館、公文書は国立公文書館、外交文書は外務省外交史料館、植民地を管轄した陸軍の史料は防衛省防衛研究所、政治家の手記は国立国会図書館憲政資料室で収集した。大学図書館での資料閲覧は在学生であれば簡単にできるが、外部者は一定の手続きが必要な場合が多い。国の公文書館は一定の手続きを行えば、比較的簡単に閲覧できる。また複写は有料だが、閲覧自体は無料である。こうした公文書館で閲覧する史料の多くは、非公刊(活字になっていないもの)史料である。記録を書いた人間の筆跡がそのまま残されており、修正したり、赤字で補ったりした痕跡までを確認することができる。特に、書簡(手紙の類)は、筆跡から書いた本人の息吹が窺え、怒りや喜びまでもが見えることがある。そうした瞬間こそ、やはり史料を残すのは人間なのだ、と改めて感じることができる。

簿冊史料(公文書を冊子の形に綴じたもの)を調査する際には、年代などから「およそこうした史料がこの簿冊に入っているはずだ」と予想しながら読んでいくこともある。大体の場合空振りに終わることが多いが、予想通りに求めていた史料に出くわした瞬間は、思わず興奮で手が震える。その逆に、ただ漫然と研究関心に関係する簿冊史料を繰っている時に、別のテーマで調べていて分からないままになっていた問題に直結する史料と出くわし、驚愕しつつ興奮することもある。このように、史料をめくらなければ探している史実とも出会えない。根気のいる作業で、空振りの方が多いのだが、探していた史料との出会いが何よりも喜びである。

それでは海外での史料収集について、中国山東省の青島市にある档案館(とうあんかん、日本での文書館に相当する)での体験を以下に記そう。青島という都市は山東半島の南側に位置し、北京と上海とのちょうど中間に位置する。1898年から第一次大戦によって日本が占領する1914年までドイツが租借し、港湾施設と鉄道を備えた近代都市として建設された。私の関心は、日本占領後の青島における教育の歴史である。特に学校教員がどのような経緯を経て青島に来たのか、先に述べたような簿冊史料を用いて研究し、それを博士論文としてまとめた(『青島の近代学校－教員ネットワークの連続と断絶』、皓星社、2012年６月として刊行)。しかし博士論文をまとめる時には主に日本国内で得られた史料を中心に研究しており、現地の様子を知らないままであった。それでは史料を深く読みこなせないと思い、青島で在外研究をしようと考えた。私が青島に滞在していたのは2011年夏から2013年初めに掛けて、足掛け１年半であった。この期間に青島市档案館での調査を行った。最初は日本の大学教員の紹介状を持っていったが、現地の大学教員の紹介状が必要だと言われて档案館に入ることすらできなかった。しかし現地の中国海洋大学の教授と知古を得て紹介状をいただき、調査を始めることができた。調査方法自体は日本と同様だが、そこに至るまでが大変であった。

ウェディングドレスはなぜ白いか

総合文化学科　准教授　増田　榮美

９月に入り、秋の気配が感じられる頃、軽井沢の結婚式場や教会では結婚シーズンを迎える。週末ともなると、沢山の結婚式が行われ、ウェディングドレスに身を包んだ美しい花嫁が、列席者からの祝福の声に包まれ幸せな笑顔を浮かべているシーンを見ることができる。縁もゆかりもないが、見ているとこちらも幸せな気持ちになる。きっと花嫁には周囲を明るく幸せにする力があるのだろう。

ところで、ウェディングドレスが白いのはなぜか、考えたことはあるだろうか。ウェディングドレスといえば当然のように白であり、色のついたドレスは区別してカラードレスという。ゼクシィトレンド調査2016によると、日本では、54.6%の花嫁がキリスト教会式で挙式し、そのほとんどがウェディングドレスを着用している。結婚式を実施した花嫁のうち94.7%が何らかの形でウェディングドレスを着ていることから、神前挙式を選択した16.6%の花嫁も、色打掛や白無垢の後、ほとんどがお色直しでウェディングドレスを着用していることが窺える。それだけ花嫁はウェディングドレスに憧れているということなのだろう。

では、いつ頃からウェディングドレスは白かったのか。白いウェディングドレスが流行したきっかけは、19世紀のイギリス、ヴィクトリア朝時代といわれている。1840年２月、ヴィクトリア女王がアルバート公との結婚式で白いドレス、ホニトンレースのベールを着用したことがミドルクラスに多大な影響を与えたという（坂井妙子1997「ウェディングドレスはなぜ白いのか」）。ヴィクトリア女王はイギリスで初めて結婚式でベールをつけた花嫁ということになる。もともとアッパークラスでは流行スタイルとして白のドレスが着用されていたが、女王が着ることでイギリスの正統な花嫁衣裳へと昇格することになった。当時、ファッション雑誌がこぞって女王の婚礼衣装を取り上げたことから瞬く間に浸透し、レースのベールに白のドレスというヴィクトリアスタイルが受け継がれていくことになった。ヴィクトリア女王とアルバート公は相思相愛での結婚で、二人の仲が良かったことも憧れとなった一因といえる。アルバート公が42歳の若さで亡くなってから、女王は10年以上もの間喪服で過ごしたといわれており、愛情が深かったことが窺える。2011年４月29日のワシントンポスト[1)]によると、ヴィクトリア女王がアルバート公と結婚してから10年も経たないうちに、Godey's Lady's Bookという当時のファッション雑誌で、「白いドレスを着る慣習は、素材が何であるにせよ早い時期に確立された。それは、少女時代の純粋無垢の象徴であり、彼女をたった一人の相手として選んだ男性に対する汚れのない愛情の象徴である」と紹介している。今では、世界的に見てもウェディングドレスは白く、ベールとともに着用するものとして定着している。

日本でウェディングドレスが一般的になったのは戦後のことであるから、挙式スタイルとしてのドレスは当然のように白である。もともと日本には和装の婚礼衣装で白無垢というスタイルがあり、現在でも根強い人気がある。白は純潔の色であり、「何色にも染まっていない色」、「何色にも染めることができる色」として「婚家の色（家風）に染まる」決意の表れともいわれている。このことから、白いウェディングドレスに対しては何の違和感もなく、受け入れられるのに時間はかからなかったと容易に想像できる。

純粋無垢の象徴として、汚れのない白い婚礼衣装には、欧米でも日本でも同じ想いが込められており、白であることに意味があることがわかる。ヴィクトリア女王が亡くなった時、結婚式で着用したホニトンレースのベールで顔を覆い、アルバート公との思い出と共に永遠の眠りについたという。ウェディングドレスを着るとき、白に込められた想い、ヴィクトリア女王のアルバート公への愛の深さを知っていることで、結婚式に臨む気持ちもより感慨深いものになるのではないだろうか。

このように、目の前にあるものを当然と思わず、その意味を知ることは、考え方の幅を広げ、行動を有意義なものにすることにつながる。秋の夜長、いろいろなことに興味関心を持って本を読み、疑問に思ったことを調べてみてはどうだろう。そうして得た知識は、きっと自分に深みをもたらしてくれると思う。

---

1) https://www.washingtonpost.com/blogs/royal-wedding-watch/post/queen-victoria-was-the-first-to-get-married-in-white/2011/04/29, 最終閲覧日 2017年９月30日.

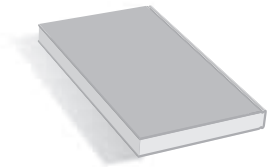
「本」の魅力

幼児教育学科１年　内山　夏恋

本は、老若男女問わず、小さい子どもからお年寄りまで多くの人たちが楽しめるものです。例えば、小さな子どもであれば絵本を読んだり、物語を楽しむのが好きな人であれば小説を読んだりと、本には様々な種類があり、その中から読む人が自分で読みたい本を選んで読むことができます。

私自身も本が好きで、特に小さい頃は家にある絵本を読んだり、学校の図書館にある本を借りて読んだりして、たくさんの本と触れ合ってきました。たくさん読んだ本の中でも、思い出に残っている本が一冊あります。それは、エリック=カール・作『はらぺこあおむし』です。私が４歳くらいの時に、この絵本を母親が買ってきてくれました。それ以来、とても気に入って何度も何度も繰り返し読んでいたのを覚えています。お腹を空かせたあおむしが、色々な食べ物を見つけて食べていくシーンが仕掛け絵本になっており、ただ淡々と読んでいくのではなく動きがあるので、当時小さかった私でも飽きずに楽しめたのだと思います。また、たくさんの食べ物を食べたあおむしが、蝶に変身するシーンでは、あんなに小さかったあおむしがこんなに綺麗な蝶に変身するのだという驚きと感動を覚え、そのページへいくまでのワクワク感を味わっていました。また、６歳頃には、妹に対して読み聞かせをすることでも、この絵本を楽しんでいました。絵本は、文字よりも絵の方が多いため、小さな子どもにとって難しくなく、とっつきやすい本のジャンルです。そのため、絵本は「本」というものがおもしろくて、楽しめるものであることを知る第一歩であると思います。

私が考える本の魅力は、物語の世界に入り込み、その物語の登場人物に感情移入することで、その世界を疑似体験しているかのような感覚を味わえるところにあると思います。最近は若者の活字離れが進んでいますが、勉強をしすぎて疲れてしまった時にこそ本を読んで、気持ちをリフレッシュしていくべきではないだろうかと、私は考えます。



本と私

幼児教育学科２年　鳴澤　舞衣

私は、幼い頃から絵本が大好きでした。小学校では毎日のように図書館に通い、自分で読むだけでなく、妹に読み聞かせをしたり、絵本に描かれている絵を真似して描いたりしていました。一番好きな絵本が『バムとケロ』シリーズです。物語の内容ももちろん面白いのですが、キャラクターの可愛さと細かいところまでこだわって描かれている絵がとても魅力的で、何度も繰り返し読んだことを覚えています。しかし、中学生になってからは勉強や部活で忙しくなり、本を読む時間もほとんどなくなりました。そんな時に、山田悠介さんの「スイッチを押すとき」という小説に出会いました。朝読書の10分間のために図書館でなんとなく借りた小説だったのですが、読んでみると私自身がこの小説の主人公なのではないかと思うくらいのドキドキ感でいっぱいでした。山田悠介さんの作品は、現実では絶対にありえないような世界観が書かれているものが多く、どれも私の想像を超えるものばかりでした。これをきっかけに、時間を見つけて様々なジャンルの本を読むようになりました。私は、本に出てくる登場人物の気持ちを考えながら読むことが好きで、本には書かれていない登場人物の気持ちを考えることで新しい発見をすることもあります。幼児教育学科に入ってからはまた絵本を読むようになり、作者が伝えたいことを考えたり文章の表現の仕方を楽しんだり、幼い頃とは違った楽しさがありました。

私は、本を読むことで様々な角度から物事を考えられるようになり、視野が広がりました。また、新しい知識、文章を読む力・書く力が身に付いたと思っています。本を読むことを通して身に付いた力はどれも保育者に必要な要素であり、これから役に立つと思います。子どもや保護者との関わりでは相手の気持ちを考えた関わりが大切になってきて、それは簡単なことではないですが、本を読みながら登場人物の気持ちを考えることと重なっている部分があるのではないかと考えています。本の魅力を子どもたちに伝えるだけでなく、一緒に楽しむことができる保育者になりたいと思います。

本との出会い

総合文化学科１年　松井　楓

私は幼いころ、本に興味がありませんでした。どちらかというと外で友達と遊ぶことのほうが楽しいと感じており、せっかく図書館からたくさんの本を借りてきてくれた母を困らせてしまっていたことをよく覚えています。

その後、小学校に入学し、高学年になると「朝読書」という活動が始まり、本を読む機会が増えました。そのときの私は、以前に比べれば本を読むようにはなっていましたが、「この本が好き」だとか、「この作家さんの本が好き」などという好みがなく、ただ漠然と本を読んでいたため、読書をすることにあまり面白さを感じていませんでした。

そんな時、学校司書の方が、「面白い本が見つからないなら一緒に探してあげるよ。」と言ってくださり、紹介していただいた本を読んだことで、初めて本の面白さに気づくことができました。それからというもの、読書量は格段に上がり、休み時間などは図書室に入り浸るようになりました。本の世界に入り込んでいくことに、楽しさや面白さを感じるようになっていったのです。

また、本を読むことによって、それまでに想像したこともなかった新しい世界を知ることができたことも、本を読むようになった理由の一つでした。そして高校生になり、頻繁に図書館に足を運ぶ私を見ていてくださった学校司書の方が、「本が好きなら司書という職業はとても楽しくてやりがいのある仕事だよ。」と声をかけてくださり、そのことがきっかけで司書を目指すようになりました。

現在、私は本学で司書になるための勉強をしています。毎日の学習の中で新しい発見が尽きません。新しいことを学ぶことができるのはとても楽しいですし、将来の目標に向けて、頑張ることができるエネルギーにもなります。これからも、様々なことを吸収していきたいです。

また、私が本に興味を持つことができたのは、司書の方との出会いがきっかけなので、将来、本を好きになってもらえるきっかけとなるような司書になれるよう、頑張っていきたいです。

本の虫

総合文化学科２年　豊岡　桃子

私の両親は本を読みません。そのため家にはほとんど本がなく、本棚が置いてあるのも私の部屋だけです。しかし小学校に上がる前には文字が読めていたし、自分の名前も書けた記憶があります。母にそれを尋ねたところ、これを読んでいたよと言いながら本を見せてくれました。手のひらほどの大きさのシリーズものの料理本で、小さい頃の私は常に持ち歩いて読んでいたそうです。母は私が料理本を読んでいるところを見て、この子は本を読むのが好きなのだと気づいたそうです。

しかし前述したように家には本がないので、図書館に通っていました。児童書のコーナーはわくわくする物語に満ちていて、絵本や読み物など関係なく読んでいました。小さい図書館なので、棚の本をあらかた読んだ後は紙芝居や図鑑も読みました。図書館にいる間は時間や周りの音などが一切気にならず、文章に没頭する「本の虫」になれました。

児童書コーナーを探検しつくしたあと文庫本がある書棚を見に行き、あまりの文章の細かさや難しさに打ちのめされたのを覚えています。そこから急に図書館が怖くなってしまい、ぱったりと通わなくなってしまったのですが、小学校に上がってからはまた「本の虫」になりました。易しい児童書と難しい文庫本の間の難易度の本と出会い、「まだ世の中には面白い本がたくさんある！」と嬉しくなりました。これまで漫画本を読んだことがなかったので、図書館で初めて漫画本を読んだとき、驚いたのを覚えています。休み時間は図書館に入り浸りで、端からどんどん本を読んでいきました。あまりに図書館に常駐しているので、しらべ学習で図書館を使うときにクラスメイトに本のありかを聞かれるほどでした。

初めて図書館でたくさんの本を目にしたときのわくわく感は、今でも図書館や本屋に訪れるたびに鮮明に思い出せます。けっして近くない図書館に通い続けて本を読んでいたのは、そのわくわく感が心地よく、気に入っていたからだと思います。これからも読書を楽しめる「本の虫」のまま、本と長く付き合っていかれたら良いと思います。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本 Vol. 3

1 幼児教育学科　教授　笹井　弘

①私の読書の中から
『自然農法わら一本の革命』
福岡正信　(春秋社、1983年、ISBN：9784393741030)

615.71 / F 82

著者は、何年も失敗を繰り返しながら伊予市で自然農法(不耕起、不除草、無肥料、無農薬)による米やみかんの生産方法を確立した。これはその記録兼解説書である。「自然農法は、キリストが着想し、ガンジーが実践した農法と云ってもよい。・・・無の哲学に立脚した農法である」と著者は云う。

②私の読書の中から
『出会いを求めて：現代美術の始源』
リ・ウーファン　(美術出版、2000年、ISBN：9784568201635)

704 / R 32

著者は、1960－70年代にかけて日本の「もの派」を理論的に牽引、現在も活躍している。本書は、アートはものの埃を払ってやることと云う「もの派」の考え方のみならず、現代美術の何たるかも理論的に理解できる内容である。

③私の著書から
『旅館はなぶさ：覗カラクリ』
笹井弘(ピンホール写真)、北條和子(文)
(アートギャラリー閑々居より出版)

748 / Sa 73

笹井が制作した立体作品「動植物」に登場する植物達をピンホールカメラで長時間露光撮影した作品を使って、北條が旅館を舞台に繰り広げられる人生の悲喜こもごもを物語に仕立てた大人の絵本。閑々居のみで販売。

2 総合文化学科　教授　大橋敦夫

①私の読書の中から
『新版　文章構成法』
森岡健二監修　(東海大学出版会、1995年、ISBN：9784486013679)

816 / Mo 62

大学生の時に、文章を書くということを実感させてくれた教科書です。その後、恩師・森岡健二先生は、自分を研究者の世界に導いてくださいました。

②これは読んでおこう―研究者の立場から―
『ことばと文化』
鈴木孝夫　(岩波新書、1973年、ISBN：9784004120988)

801 / Su 96

自分自身で観察し、考えたことが明快に説かれています。ものを考える楽しみを教えてくれる本だと思います。
ゼミで輪読することもあります。

③本学刊行物の中から
『文化の諸相
上田女子短期大学総合文化学科公開講座論集』
(上田女子短期大学、2006年、ISBN：4990021741)

379.5 / U 32

総合文化学科創設時の教員による公開講座の内容をまとめたものです。新学科に寄せるそれぞれの熱い想いが感じられます。

My Recommended Books

2017年　本学教員の新刊著作

(今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書)
著者の五十音順

・大橋敦夫 先生
『旧作新学校本館（作新記念館）所蔵教科書目録』
2017年3月発行（単著）

375.9 / Ky 8

・酒井真由子 先生
『保育内容 人間関係』
建帛社　2017年12月発行（共著）

・山本一生 先生
『コンパクト版保育者養成シリーズ 教育・保育課程論』
一藝社　2017年3月発行（共著）

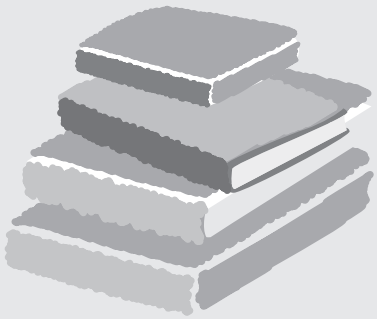
376.15 / Ky 4

『ワークで学ぶ教職概論』
ナカニシヤ出版　2017年3月発行（共著）

374.3 / I 89

・大谷誠英 先生、酒井真由子 先生、堤裕美 先生、長櫓涼子 先生、山本一生 先生
『こう変わる！新保育所保育指針』
成美堂出版　2017年8月発行（分担執筆）

376.15 / Ko 95



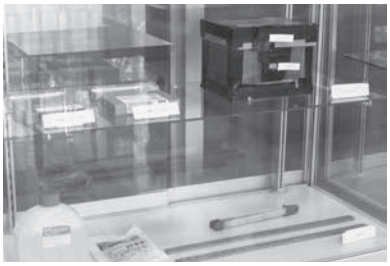
上田女子短期大学附属図書館企画展

今年度より、図書館１階ブラウジングルームにおいて、企画展をスタートしました。
先生方の作品や、学びの成果を発表する場として授業での学生の皆さんの作品を展示し、
多くの利用者の方に楽しんでいただきました。

企画展Ⅰ　５月～６月

幼児教育学科 笹井弘教授による ピンホールの作品と道具展

じっくり時間を掛けて露光撮影したピンホール作品。
笹井先生が実際に制作に使用している道具も併せて展示しました。



企画展Ⅱ　７月～９月

幼児教育学科１年「図画工作」(指導：笹井弘教授) 優秀作品

飛び出すカード展

ハロウィンやクリスマスなどの季節に合わせたカード、誕生日や卒業の
お祝いカード、キャラクターのカードなど、個性溢れる作品が揃いました。

企画展Ⅲ　10月～12月

総合文化学科 宮田暉朗教授・
総合文化学科１年「書の基本」(指導：中村好男講師)

書道作品展

宮田先生の作品と「書の基本」の授業で学生が書き上げた作品を展示しました。
宮田先生の作品が中国で石碑となり、その拓本など、迫力ある作品が並びました。

第19回図書館総合展

（11月7日㈫～9日㈭　於：パシフィコ横浜）

ポスターセッションに参加しました！

? 図書館総合展とは

図書館関連では国内最大のイベント。館種を超えた図書館界全体の交流・情報交換、また、学習環境・情報流通に関する技術と知見を発表する場。

? ポスターセッションとは

研究機関・大学・図書館・学生等がポスター掲示による発表を通じて、来場者・出展者との交流を深めるもの。

図書館サークルFLCの
ポスターと活動写真

FLC が作成
学生と図書館の
協働活動を紹介

80団体が出展した
ポスターセッション

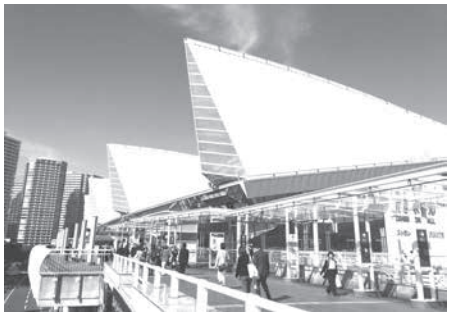
お土産も大好評でした

おすすめ本を紹介した
FLC 通信

裏山のどんぐり
マスコット

英字新聞の
ミニバッグ

来場者数
30,701 人



パシフィコ横浜

みすず
第44号

上田女子短期大学附属図書館報
2017.12　発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214　長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019　Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信　2017

「みすず」第44号をお届けします。
こうして今年度も紙媒体での発行ができましたことを、関係者一同、大変嬉しく思っております。

夜空の星がさらに美しく見える季節となりました。そして、まもなく冬休みです。行く年来る年を愛おしみながら、本との時間を大切にしたいです。

信州の冬には、本がよく似合います。

附属図書館長　長田真紀